

文章による表現力を育てる「書くこと」の指導 一個に応じた「書くこと」の指導の工夫改善について

粉河町立竜門小学校
教諭 濱崎ゆかり

1 研究のねらい

現代社会の国際化、情報化は、今後一層の進展が予想される。国際社会の一員として生きていくために、自分の考えたことや感じたことを相手に分かりやすく伝える能力が、これまで以上に必要になるであろう。情報化が進む中で、様々な情報を的確に把握し、目的や意図に応じて、自分の思いや考えを相手に正確に伝える能力が、さらに求められてくる。

そのような時代に生きる子どもたちに、必要不可欠な力の一つと思われる論理的な文章を書く力、すなわち、自分の思いや考えを相手に明確に伝達することのできる文章表現力を身に付けさせることが大切である。

昨年度担任した3年生の学級には、書くことに苦手意識や抵抗感を抱いたり、自分の思いや考えを文章にまとめることを負担に感じたりする子どもが多かった。また、文章を書く力が十分定着していない状況が見られ、その個人差も目立った。

この子どもたちに文章による表現力を身に付けさせるためには、書くことへの意欲を高めることが必要であると考えた。

書く能力において個人差が大きいという現状と、書く活動は個の活動であることを踏まえて、個に応じた「書くこと」の指導の工夫改善に視点を置いて、研究を進めていきたい。

2 研究仮説について

(1) 「書くこと」についての子どもの実態

検証授業の対象学級児童(第4学年39人)に対して、「書くこと」に関する意識調査を行った。以下は、意識調査の結果から得られた子どもの実態である。

「文章を書くことは好きですか」の問いに対して、「好き」「少し好き」と回答した子どもは11人(28%)、「どちらともいえない」と回答した子どもは16人(41%)、「少し嫌い」「嫌い」と回答した子どもは12人(31%)であった。

また、「文章を書くことは得意ですか」の問いに対して、「得意」「少し得意」と回答した子どもは10人(26%)、「どちらともいえない」と回答した子どもは16人(41%)、「少し苦手」「苦手」と回答した子どもは13人(33%)であった。

さらに、「書くことは好きですか」と「書くことは得意ですか」の結果を照らし合わせてみたところ、書くことが好きな子どもは書くことに自信があり、書くことが嫌いな子どもは書くことに苦手意識をもっていることが分かった。つまり、書くことが好きであることと得意であること、書くことが嫌いであることと苦手であることは、相関関係にあるということが明らかになった。

なお、文章を書くことが嫌いで苦手な子どもたちは、「何を書いていいのかわからない」「書き出しが難しい」「長い文章を書く時に、文の続け方が難しい」「書くことがまとまらない」などをその理由として述べている。これらは、書くことを負担に感じている子や書く力が十分に定着していない子どもたちの文章表現の課題といえるであろう。

これらの課題を解決するためには、子ども一人ひとりのつまづき、学習方法、関心、意欲、態度、表現力や理解力などに応じて、複数の学習活動が展開できるように意図的、計画的な個に応じた指導の工夫をすることが重要と考え、本研究テーマを設定した。

(2) 研究仮説

「書くこと」の指導において、子どもの実態に応じて、学習の見通しをもたせるための「学習計画表」や複数の支援教材である「お助けプリント」を準備し、達成状況が明確になるような評価や学習形態の工夫改善を行うことで、意欲的に書く活動に取り組み、思いや考えを相手に明確に伝達することのできる文章表現力を高めることができるであろう。

3 研究の内容と方法

本研究の概要を図1に示し、研究仮説を検証するための具体的な手立てを考えた。

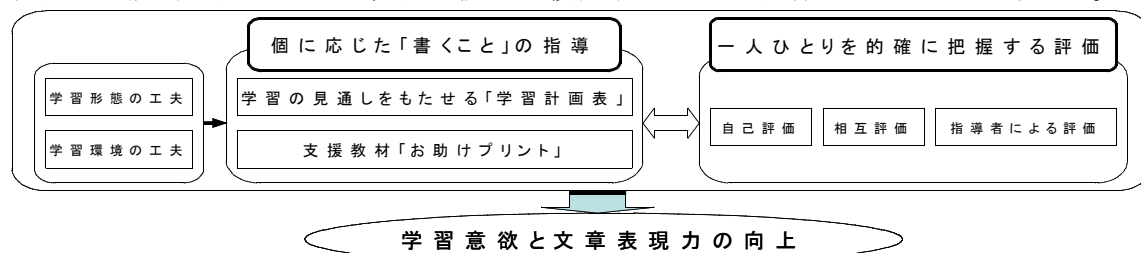


図1 研究概要

(1) 個に応じた「書くこと」の指導の工夫

ア 学習計画表

子どもたちに学習の見通しをもたせるために、単元の全体計画及びめあてと内容を学習のはじめに提示する。

一人ひとりが学習のめあてと内容を把握することで、主体的に学習を進めることができ、そのことが学習意欲の向上につながるであろう。

イ お助けプリント

書く活動は基本的には個人の活動であるため、文章を構成する力や記述する力を一人ひとりが確実に身に付ける個別指導が求められる。個々の子どもの特性を把握し、それぞれの学習状況に合わせて、設問やヒントを記した複数の「お助けプリント」を用意して個別指導を図りたい。

「お助けプリント」を用いることで、一斉授業においても個に応じた指導が可能になり、一人ひとりの能力を伸ばすことができると考える。

(2) 一人ひとりを的確に把握する評価の工夫

『小学校学習指導資料 新しい学力観に立つ国語科の授業の工夫』（※1）では、評価について、次のように示されている。

- ・子供たちが自分の言葉で考えたり、想像したりすることを共感的に理解し、支援するという考え方に立って評価を進める。
 - 子供一人一人のよさや可能性をのばすための指導と評価を工夫する。
 - 子供の側に立った共感的な理解と指導を基盤とする。
 - 評価については、観点別の学習状況の評価を基本とし、子供一人一人の学習状況を多面的に把握するようにする。

以上のような視点を重視して、子どもの側に立つ指導と評価の工夫を進めていきたい。

具体的には、自己評価と相互評価、また、指導者による評価の在り方について考えていくこととする。

ア 自分の考えを深める自己評価

学習活動の振り返りや次の学習内容を意識させるために、評価の観点を明確にした「学習ふり返しカード」を作成し、自己評価させる。

「学習ふり返しカード」には、項目や数値の評価だけではなく、理由欄や自由記

述欄も設けた。言葉を用いて自己評価することは、自分の考えを順序立てて整理でき、より意識的に自分の学習を振り返ることが可能になると考える。

イ 互いに高め合う相互評価

具体的な評価の観点を示した「アドバイスカード」を作成し、学習のねらいに沿って相互評価させたい。

相互評価させることにより、自分の表現のよい点に気付かせ、自信をもって書く活動に取り組ませたい。また、友達の文章の中から自分の表現に生かせる点を見つけさせることで、文章による表現力を高めさせたいと考える。

ウ 指導者による評価

学習活動の観察と子どもの文章をもとにして、指導者による評価を行う。個々の学習状況を「個人カルテ」に記し、それを次時の指導に生かしたい。

(3) 学習形態や学習環境の工夫

「書くこと」の指導においては、学習のめあてに応じて、個人、ペア、グループ学習などを織り交ぜ、学習形態に変化をもたせていくことが効果的と考える。

調べ学習では、教室に読書コーナーや先生への質問コーナーを設置するなど、テーマに応じて、それぞれの子どもが自分のペースで学習に取り組めるような学習環境の工夫を図りたい。

また、単元の学習に関わる学級掲示を行い、学習内容や個々の課題の取組状況を確認できるようにする。

さらに、「学習計画表」や「お助けプリント」などを蓄積したポートフォリオを教室に置き、一人ひとりが学習を振り返るとともに、めあてをもって書く活動に取り組むことができるようにする。

(4) 検証授業の計画について

ア 単元名 「わたしたちの体について調べよう」

イ 題材名 「体を守る仕組み」 (光村図書 国語 4年下)

ウ 単元の目標

- ・自分たちの体について興味をもち、本や事典などを使って、体について疑問に思うことを進んで調べることができる。(関心・意欲・態度)
- ・中心となる語や文をとらえて、段落相互の関係を考えながら教材文を正しく読むことができる。(読むこと)
- ・目的に応じて、必要のある事柄を収集したり、選択したりすることができる。(書くこと)
- ・調べたり考えたりしたことをまとめて、伝えたいことが相手に分かるように文章に書くことができる。(書くこと)

エ 単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	書く能力	読む能力	言語についての知識・理解・技能
・体の仕組みについて関心をもち、自分の体で不思議に思うことや疑問について調べようとしている。 ・相手によく分かるような文章で伝えようとしている。	・目的に応じて、必要のある事柄を収集したり、選択したりしている。 ・書こうとする内容を明確にしなが、組み立てを考えて書いている。	・目的に応じて、段落相互の関係を押さえ、中心となる語や文をとらえて文章の内容を正しく読んでいる。	・文と文との意味のつながりを考えながら、指示語や接続語を使っている。 ・句読点を適切に打ち、必要な箇所は改行して書いている。 ・表現したり理解したりするために、必要な文字や語句について辞書を利用して調べている。

オ 単元について

単元「新聞記者になろう」(光村図書 国語 4年上)では、子どもたちは経験したことを新聞にまとめていく活動を行っている。その学習においては、組立てを考えて書く力や文章を読み返す力の不十分さが見られた。

本単元では、分かりやすい書き方を題材から学ばせ、自分の課題を見付けさせるとともに、調べて伝えたいことを文章に表現させることで、子どもたちの文章によ

る表現力を育みたいと考える。

題材である「体を守る仕組み」は、読み手を誘い込むような書き出し、指示語の効果的な使用、適切な接続語の使用、説明する文章の構成、語りかけるような文末表現など、表現の工夫が随所に見られる説明文である。

「白血球」などの専門用語が出てきているが、体の中で日々起きている事実なので、子ども自身の生活に関心を寄せながら、興味をもって読むことができる。体を守る仕組みを学び、生活や体について見直させることで、もっと知りたいことや疑問に思うことなど、個々の課題をもたせて学習に取り組ませたい。課題を解決するために必要な資料を探し、それを読み手に分かりやすく表現することを学ぶのによい題材である。

接続語の働きを理解させるとともに、段落構成に目を向けさせて題材を読ませる。次に、自分に必要な資料を探してまとめさせ、文章作りをする表現活動へとつなげていきたい。

カ 単元の指導と評価計画

		学習活動	支援	学習活動における具体的評価規準		
				おおむね満足できると判断できる状況	十分に満足できると判断される状況	努力を要すると判断された児童への手立て
第一次	第1時	・体について不思議に思うことを、「短冊カード」に書く。	・題材を通読させて、自分たちの体に関心をもつように促す。	(関)体について関心をもち、不思議に思うことを「短冊カード」に書こうとしている。 【短冊カード】【学習ふり返りカード】	・体について不思議に思ったことを文章で書いている。	・助言を与えることで、体について不思議に思うことを気付かせ、「短冊カード」に書かせる。
第二次	第2・3・4・5時	・全文を通読し、三つのまとまりに分ける。 ・教材文の内容を詳しく読み取る。 ・第三のまとまりから筆者の思いを読み取り、自分の考えをもつ。	・中心となる語や文をとらえさせ、内容をまとめながら読むように助言する。 ・「お助けプリント」を用いて、細かいところに注意して読むように助言する。	(読)書かれている内容を根拠にして三つのまとまりに正しく分け、説明している。 【お助けプリント】【発言】 (読)「皮ふ、なみだ、せん毛」の働きと「白血球」の働きの四つを読みとっている。 【お助けプリント】【発言】 (読)第三のまとまりから筆者の呼びかけを読み取り、自分の感想を加えて発表する。 【お助けプリント】【発言】	・三つのまとまりに正しく分け、「自分を守る仕組み」「入りこませない」「白血球」「働き続ける」などのキーワードをはずすことなく、その根拠を説明している。 ・「皮ふ、なみだ、せん毛」の働き、「白血球」の働きを読み取り、自分の経験と比べている。 ・第一、第二のまとまりの関係を考えて、筆者の思いをまとめ、自分の感想を発表している。	・「話題を提示している部分」「例を挙げて説明している部分」「まとめている部分」などの段落の関係をとらえるためには、接続語に着目すればよいことに気付かせる。 ・対話により、自分の経験を想起させて、取り組ませる。 ・文末表現に注意させ、筆者の呼びかけに気付かせる。
第三次	第6・7時	・「体を守る仕組み」について、もっと知りたいことや疑問に思うことなどのテーマを決めて調べる。	・「学習計画表」をもとに、学習の見通しをもつことができるように促す。	(関)体の仕組みに興味をもち、学習の見通しをもつ。 【観察】 (書)事典や図鑑などから資料を集めている。 【お助けプリント】	・自分のこれまでの経験に基づいて、体を守る仕組みについて述べる。 ・複数の資料から自分に必要なものを選択している。	・自分の生活や体についてよく見つめさせ、体を守る仕組みに興味をもたせるよう、体のポスターを示す。 ・図書を選択できない子どもには、あらかじめ用意した資料を提示する。
第四次	第8・9・10・11・12時	・分かりやすいまとめ方を考え、調べたことを文章に書く。 ・参考図書から書き抜いたメモをもとに、指示語や接続語を使って自分の伝えたいことを分かりやすい文章に直していく。	・書こうとすることを明確にさせ、組立てを考えていくように、書き方のモデルを示す。	(書)書きたいことを明確にし、段落と段落のつながりを工夫して、組立てメモの構成を考える。 【お助けプリント】 (書)「お助けプリント」を活用して、書き出しの文章を書いている。 【作品】【観察】【お助けプリント】 (言)文脈に沿って指示語や接続語を	・内容ごとの順序や軽重を考えて、分かりやすい文章を構成している。 ・「お助けプリント」を参考にして、自分なりに工夫している。 ・読み手を意識しながら、指示語や	・調べた内容が似通っているものを集め、まとめ直して見るように助言する。 ・自分で意見をまとめることができない子どもには、穴埋め形式の「お助けプリント」を提示する。 ・題材「体を守る仕組み」を短くまとめ

行った。テーマ決定ができた子どもは、次の調べ学習においても意欲的に取り組むことができた。

また、文章構成や記述の段階においては、「お助けプリント」に「はじめ・中・まとめ」のそれぞれの文を書くための例文を示した。穴埋め形式の例文に適切な言葉をあてはめさせたり、自分の表現に合う例文を選ばせたり、例文を参考にして書き進めさせたりした。子どもの多様な実態に応じて複数の支援教材を用意することで、個々が文章表現にスムーズに取り組むことができたと考える。

学習後の意識調査において、大半の子どもは、「『お助けプリント』が学習に役立った」と答えている。「『お助けプリント』で書き出し文の練習をして、上手に書けるようになった」「『お助けプリント』を使って『はじめ・中・まとめ』の文に分けて書いたので、書きやすかった」などの感想が多く見られた。

書く学習において支援を要するD児は、学習後の感想に、「『お助けプリント』があったからひとりで文章を書くことができた。よかった」と記述していた。授業中にも、「お助けプリント」を活用して着々と文を書き進めることができ、度々満足気な様子がうかがえた。D児の文章は、読む人に誘いかけのような書き出しができており、接続語を用いた段落のある表現ができていた。「お助けプリント」を活用して書く活動を進めたことで、作品を完成することができ、D児の書くことへの自信につながったようである。

子どもの特性を把握して、学習状況に合わせて設問やヒントを記した「お助けプリント」を指導に生かすことで、個に応じた指導が可能になった。そのことが多くの子どもたちの書く意欲を高めたということが分かる。

ウ 一人ひとりの子どもの学習状況を的確に把握する評価の工夫

(ア) 自分の考えを深める自己評価

取材や記述段階の授業終了時に「学習ふり回りカード」(図4)を用いて自己評価を行った。

評価の観点に沿って、「よくできた・できた・むずかしい」の3項目で評価させた。子どもが理解できる言葉で評価の観点を示したことで、大多数の子は自分の達成度を適正に評価できていた。

また、学習のねらいを示したことで、多くの子どもはねらいを確かめ、自由記述欄に意欲の高まった点と感想を書いていた。しかも、数名の子どもは自分のがんばった点だけでなく、次の学習の課題についても記述することができた。

E児は、「まとめの文章で、自分の気持ちも書けたし、短い文章もだんだん書けるようになりました。作文がすらすら書けるようになりたいです」と自由記述欄に記していた。自己評価することで、努力の過程や学習の成果を自ら確認できるようになったことが、ここからも明らかである。

(イ) 互いに高め合う相互評価

書く段階においてペア学習を取り入れ、文章を交換し読み合わせさせた。その後、評価の観点を示した「アドバイスカード」を用いて相互評価させた。

子どもたちは、表現をよりよくするための情報を得るとともに、自分の文章のよさを認めてもらうことで、書くことに自信をもつことができた。

以下は、「アドバイスカード」に記された内容と、それをもらった子どもが学習後に書いた感想である。

(アドバイス)

たくさんの文章を書いていて、接続語を使っているのがとてもいいと思うよ。

(学習後の感想)

〇〇ちゃんにアドバイスカードをもらって自信ができた。自分の文章を何度も見直して、もっといい文章にしようと思った。

図4 E児の「学習ふり回りカード」

アドバイスした部分と点(、)や丸(。))を見直したら、もっと読みやすい文章になるよ。	友達に読んでもらい、どこがおかしいのかをアドバイスしてもらったので、間違っている文を直せた。また、点や丸、接続語や指し示す語も正しく使えるようになった。
--	--

これらは、友達からのアドバイスが、書くことに対する意欲を高めた例である。

また、「アドバイスカード」に、「脳の役目などをたくさん書いてよく分かりました。ぼくもよく分かる文章を書いていこうと思いました」と記している子どももいた。文章を交換し読み合うことにより、友達の文章のよいところを学び、自分の表現に生かそうとしていることが明らかである。

友達からの感想やアドバイスをうれしく感じるとともに、文章を書き進める意欲につながった子どもが多く見られた。

相互評価を行うことで、友達のアドバイスを生かしながら自分自身の表現を見直すことができ、子どもたちは共に学び合い、互いに高め合う場を得たといえる。

(ウ) 指導者による評価

書く力を育成するためには、個々の課題に応じた適切な指導が必要である。子どもの学習の足取りを「個人カルテ」(図5)に記録し、次時の支援に生かした。

一人ひとりの子どもの学習状況を評価の観点に沿って見取り、「個人カルテ」に記した。

さらに、その評価に基づいて、個別に相談を受ける時間を設けたり、適切な時期に「お助けプリント」を提示したりすることにより、意図的、計画的な指導を心がけた。

「個人カルテ」を作成し、活用することで、一人ひとりの書く力を的確に把握することが可能になった。また、個性や能力に応じた指導を進める大きな助けになったと考えている。

エ 学習形態や学習環境の工夫

授業の導入では一斉学習の形態をとり、子どもに学習のめあてを示した。その後、個人、ペアあるいはグループ学習を組み入れ、学習形態の工夫を行った。

調べ学習では、主にグループと個別を織り交ぜた学習形態をとった。友達と本を交換して読む子どもや自分で本を見つけて読む子どもなど、それぞれが自分のペースで学習を進める様子が見られた。

「学習ふり返りカード」には、「〇〇ちゃんが本を貸してくれたので、自分の調べたいことが見付けられました」「友達や先生が探す手助けをしてくれて、『脳の図鑑』が見付けられました」「〇〇君や△△君に調べ方を教えてもらったので、書く材料を見付けることができました」などの感想が多かった。グループ学習の形態をとったことにより、題材を選んだり書く事柄を見付けたりする学習が円滑に進み、意欲的に取り組むことのできた子どもが多かった。

学習環境の工夫としては、「体図書館コーナー」を教室に設け、休憩時間や放課後に自由に体に関する本を読むことができるようにした。さらに、「体の仕組みについてのテーマ」の一覧表を学級掲示した。

そのことで、体に関する本を読む子どもたちの様子が教室のあちこちで見られた。

個人カルテ 名前()		A:よくできた	B:ふつう	C:もう少し工夫が必要
月日	観 点	評 価	気付いたこと	
/	関/意/態	体に興味をもち、学習の見通しをもっている。		
/	書	自分のテーマを決めている。		
/	書	必要な資料を見つけ、調べている。		
/	言	難語句を辞書を利用して調べている。		
/	書	文章の組み立てを工夫している。		
/	書	書き出しの文を読み手を意識した書き方をしている。		

図 5 「個人カルテ」

〇〇ちゃんは目について勉強しているね。どんなことを書くのかな。



写真 学級掲示
「テーマの一覧表」

また、「体の仕組みについてのテーマ」の一覧表を指し、「〇〇ちゃんは目について勉強してるね。どんなこと書くのかな」といった声を聞くこともできた。

書く指導を効果的に進めるためには、学習形態や学習環境の工夫も重要であると再確認できた。

(2) 学習後の子どもの変容について

単元の学習後、子どもたちの変容を調べるために、総括的評価として意識調査と確認テストを実施した。

ア 意識調査の結果から

「学習を終えて、思いや考えを文章に書くことが好きになりましたか」の問いに対して、「好きになった」と回答した子どもが20人(51%)、「少し好きになった」と回答した子どもが17人(44%)、「どちらともいえない」と回答した子どもが2人(5%)であった。以上の調査結果から、文章を書くことについての子どもの意識の変容は明らかになった。

好きになった理由として、次のような意見が挙げられている。

- ・「本で調べたので書く材料を見付けることができた」(9人)
- ・「文章の書き方や直し方が分かった」(8人)
- ・「書くことが次々に思い浮かび、すらすらと書けるようになった」(8人)
- ・「書き方や接続語の使い方が分かった」(4人)
- ・「説明文はどのような順序で書いたらよいのか分かり、楽しく書くことができた」(3人)
- ・「文章の書き出しが難しかったが、はじめの文の書き方が分かった」(3人)
- ・「書き終わったらうれしくて、すっきりした気分になった」(2人)
- ・「何を書いたらいいのか分かった」(1人)

個に応じた「書くこと」の指導の工夫改善によって、苦手意識や抵抗感が少なくなった。また、子どもたちは達成感を味わい、書くことを好きになったことも分かる。そのことが、書く力の向上につながったといえよう。

その一方で、男児2人は「変わらない」と答え、「国語が苦手だから」「うまく書けなかったから」という理由が挙げられている。学習後にも書くことへの苦手意識や抵抗感が依然として見られた。しかし、全体としては、「好きになった」と答えた子どもが大多数であった。

また、「学習を終えて、思いや考えを文章に書くことが得意になりましたか」の問いに対して、「得意になった」と回答した子どもが13人(33%)、「少し得意になった」と回答した子どもが25人(64%)、「どちらともいえない」と回答した子どもが1人(3%)であった。

事前の意識調査で、「苦手」「少し苦手」と答えた13人すべての子どもが、学習後の意識調査では、「得意」「少し得意」になったと回答している。

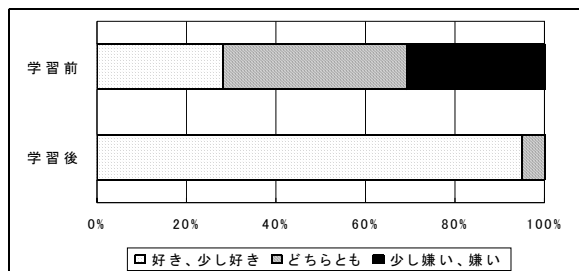


図6 文章を書くことは好きですか

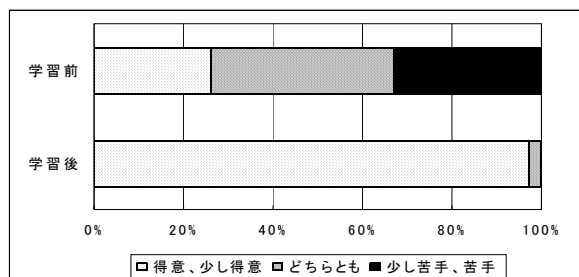


図7 文章を書くことは得意ですか

「お助けカード」 32 (人)

「アドバイスカード」 16

「学習計画表」 10

「原こう用紙を使って書こう!」の説明プリント 9

「学習ふり返しカード」 5

「お助けプリント」などを用いて、文章の書き方の指導を進めたことで、個に応じた指導を充実させることができた。この指導により、大多数の子どもは書くことへの苦手意識や抵抗感が軽減され、書くことに自信をつけたことが分かった。

子どもの変容を見るために、単元のはじめにレディネステストを実施し、単元終了時に同じ形式と内容の確認テストを行った。

最も変容が著しかった点は、大半の子どもの文章の量が増加したことである。二点目は、接続語を用いて文脈の整った文章が書けるようになったことである。三点目は、「はじめ・中・まとめ」に分け、段落を設けて表現できるようになったことである。

文章の量が増えた 36

接辞を用いて、文脈の整った文章を書いている 2 31

「はじめ・中・まとめ」に分けて書いている 28

正しい原稿用紙の使い方ができている 12 13

推敲ができている 6

■ レディネステスト □ 確認テスト

ウ 抽出児について
(ア) F児について

図 10 F児の変容例

F児は、「文章を書くことは好きですか」の問いに対して、学習前は「嫌い」、学習後は「少し好きになった」と答えている。その理由としては、『お助けプリント』を使って、『はじめ・中・まとめ』に分けて書くと書きやすいことが分かった」と回答している。

F児は1行を書くのにもかなりの時間を要する子どもで、レディネステストの結果は3行の文章しか書けていなかった。しかし、図10に示しているが、確認テストにおいては、伝えたいことを明確にした文章を18行にわたって書くことができていた。ここから、F児の書く力が高まったことが分かる。この高まりが、文章を書くことが嫌いであったF児を変容させたと考ええる。

以上のことから、書く意欲と書く力は切り離せないものであることが明らかになった。

(イ) G児について

G児は、「文章を書くことは得意ですか」の問いに対して、学習前は「ふつう」、学習後は「得意になった」と答えている。

レディネステストでは段落のない文章を書いていたが、確認テストでは「はじめ・中・まとめ」の文章構成で、しかも、接続語を使って書くことができるようになった。

学習後の感想では、「テーマについて調べる時に、本がたくさんあって調べやすかった。『お助けプリント』があったので、文章が考えやすくてよかった。それから、友達にアドバイスしてもらうことで、長い文章を楽しみながら書けた。長い文章を書くには、『はじめ・中・まとめ』を分けて書くと書きやすいことが分かった。また、点(、)や丸(。))を入れて読みやすい文章にすることができるようになったのがよかった」と記していた。学習を通して、自分のできるようになった点を意識し、しかも何が自分の書く力の向上に役立ったかも明確にできている。今回の学習により、大きな成長が見られた子どもの一人である。

5 研究のまとめ

この一年間、個に応じた「書くこと」の指導の工夫改善に視点を置き、研究を進めてきた。取材・構成・記述・推敲という作文指導の過程に沿って、個に応じた指導を行うことが、子どもたちの書く意欲を高め、文章による表現力を育てるために欠かせないものであるということを実感した。

また、単元のまとめとして、小冊子「体不思議大事典」を完成することができた。小冊子を手にした子どもたちは、「ぼくの文章が載っているよ」などの喜びの声を挙げ、どの子も表現する楽しさや達成感を味わうことができたようである。

しかし、図9に示す確認テストの結果から分かるように、推敲できるようになった子どもは少数であった。文章を読み返し、間違いを正したり、表現を工夫したりする推敲の力については、まだ十分身に付けさせるまでには至らなかった。そこで、推敲段階における、個に応じた指導法のさらなる工夫改善が必要と考える。

今回の研究では、「お助けプリント」などを用いて個に応じた指導を進め、子どもたちの文章による表現力を高めさせることができた。本研究を生かして、今後も研鑽を積み、相手、目的や意図に応じ、自分の思いや考えが相手に伝わるように文章を書く力を育むための指導の在り方をさらに追究していきたい。

〈引用文献〉

※1 文部省 『小学校国語指導資料 新しい学力観に立つ国語科の授業の工夫』東洋館出版(1995)

〈参考文献〉

- | | | |
|----------|------------------------|---------------|
| ・国語教育研究所 | 『作文技術指導大事典』 | 明治図書(1996) |
| ・文部省 | 『小学校学習指導要領解説国語編』 | 東洋館出版(1999) |
| ・小森 茂 | 『新しい学力観に立つ国語科の学習指導と評価』 | 明治図書(1999) |
| ・文部科学省 | 『小学校学習指導要領解説総則編』 | 東洋館出版(2004) |
| ・文部科学省 | 『これからの時代に求められる国語力について』 | 文化審議会答申(2004) |
| ・山本 捷子 | 『確かなことばの力を育てる』 | 明治図書(2004) |